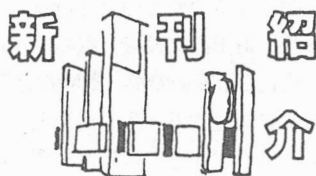


新刊紹介



儀我壮一郎著

『薬の支配者』

本書は、ほぼ半世紀に亘って医薬品の社会的諸側面を研究してこられ、すでに80歳を超えた著者の、このテーマでの総まとめである。長年の蓄積が集約的に詰まっている労作である。

全体の構成は以下の通りである。

はしがき

第1章 保健・医療の歴史と薬の役割

第2章 米欧の「多国籍製薬企業」

第3章 「多国籍製薬企業」の研究開発、生産、流通
支配

第4章 「他国籍製薬企業」の諸矛盾

第5章 日本の製薬企業の国際的特徴

第6章 薬害多発の政治的・経済的構造

第7章 「多国籍製薬企業」に対する民主的規制
資料

この目次から察せられるように、本書は医薬品の研究開発、生産、流通の全過程を扱い、歴史的、国際的視野から分析をしている。量・質ともに圧巻は第5章であろう。多国籍企業研究の専門家としての強みを十分に発揮し、国民の健康に責任を持たないという点では国際的にも異常に突出した、日本の多国籍製薬企業を多面的に解明している。初心者には、第1章と第5章をまず読むことをすすめたい。そして「社会的責任を果たさせるにはどうしたらよいのか」が第7章で展開される。

さて、本書のライトモチーフは明らかに「薬の支配者」を現在の「多国籍製薬企業」から国民へ転換することである。国民が「薬の主人公」になることの必要性、必然性、筋道を明らかにするのが、本書の目的である。この目的は十分に達成されている。この点で特に著者は、薬業労働者、医療労働者、医療専門家、そして患者・住民の積極的関与に期待を

寄せている。具体的には、資料にも含まれている医労連の第一次、第二次の「医薬品と薬価に関する提言」、日本生活協同組合連合会医療部会の「患者の権利宣言」、全国保険医団体連合会の「開業医宣言」等が、医薬品に関しても、国民的規制を進める上での足がかりになることが示されている。

最後になるが、本書は医薬品の社会的諸側面に関するコンパクトな百科全書の著作であり、用いられている多数の文献・資料とあいまって、今後の研究にとってきわめて有益なベースを提供している。これも大きな功績であろう。

(新日本出版社・2000年1月刊・2600円)

(日野秀逸・ひの しゅういつ・常任理事・東北大学)

塩沢美代子監修、広木道子著

『アジアに生きる女性たち』

経済のグローバル化のもと、安くて良質な労働力があればいつでもどこへでも生産拠点をうつすことが可能な多国籍企業にとって国境はない。今、アジアのどこの国でも、相次ぐ、企業閉鎖・移転で労働者の大量解雇が続いている。雇用不安を抱える労働者が、組合を組織したり組合活動を行うことについては、多くの国では、労働者を保護する法律や行政機能が不十分である。働き続けている女性たちは、自主退職を強要され、パートや臨時的非正規労働者に追いやられている。

こうした中、本書では、アジア女子労働者交流センターの15年の活動の歩みを紹介しながら、アジアの女性労働者の実情とそれに深い関わりを持つ日本企業のアジア進出の問題、「生きる」ためにたたかうアジアの女性労働者の運動の展開を明らかにしている。

本書を通して、日本の私たちの暮らしや労働運動が直接アジアの女性たちに大きな影響をあたえていること、身勝手な多国籍企業の民主的な規制の力は、労働者の国際連帯のたたかいによることを認識させられる。

第1章では「アジアの工業化と労働者の状況」として、アジア各国が早くは、1960年代半ばから、ルックイーストをかかげ、経済開発のため、豊かな資源